

## 主 題：新生した人 2

## 聖書箇所：コリント人への手紙第二 5章15節

前回から私たちは、主の前に価値ある生き方、決して後悔をしない人生の過ごし方について、パウロの教えを学んでいます。私たちが神に喜ばれる歩みをするために、後悔のない人生を歩み切るために、いったい私たちには何が必要なのか？前回、そのために「救い」とはどういうものであるかを知る必要があることを見ました。「救い」とは、ただ、私たちが天国への切符をもらうことだけではなかった、そこにはそれ以上のものがありました。罪の赦しをいただくこと、確かに、それは神が約束をしてくださっていますが、それよりももっと大きなものがあるのです。もちろん、これは救いや罪の赦しが小さいと言っているわけではありません。それだけではないということです。

「救いとはどういうものなのか？」、パウロが教えてくれています。主イエス・キリストが私たちのために死んでくださったのは、クリスチャンの皆さん、そこには二つの目的があったと彼は言います。

(1) もう自分のために生きないこと

(2) 自分のために死んでよみがえった方のために生きること

なぜ、イエス・キリストはあなたに代わって十字架で死んでくださったのか？それはあなたの生き方が変わるためにです。みことばが教える救い、神が与えてくださる救いというのは、人を新しく生まれ変わらせるものであるということです。「救い」というのは、これまで生きて来た自分のために生きる人生に終止符をうち、そして、主のために生きる新しい人生のスタートであると、そのようにパウロが教えています。「新しく生まれ変わる」ということです。恐らく、皆さんも聖書を学んでおられて、聖書の中には「このように生きていきなさい」という神の命令が溢れていることに気付かれるでしょう。

「このように生きていきなさい。こういうことをしてはなりません。」と、私たちはどのように生きていくのか？聖書は神のみこころを私たちに明らかに示してくれています。

なぜ、そのような神のみこころが記されているのでしょうか？少なくとも二つのことを考えることができます。

(1) 神の基準、神のみこころが示されることによって、そのみこころに沿っていないということが罪人に明らかになります。神はどんな生き方を我々人間に求めておられるのか？どのような生き方をクリスチャンに求めておられるのか？その神のみこころを見るときに、自分がそこから外れているのかどうか、そのことが明らかになります。イエスを知らない人、イエスを信じていない人は、自分の歩みがいかに神のみこころから外れたものか、どれ程大きな罪を犯しているのかが明らかになります。クリスチャンも同様です。主がこのように歩みなさいと教えていること、命じていること、その歩みに対して自分はそれらを実践をしているのかどうか、それを吟味する機会になります。

(2) もう一つ考えられることは、主の命令を私たちが見るときに、その命令は実践できるという確信を我々に与えます。だから、神は私たちに主のみこころを明らかにしてくださっているのです。だから、主は私たちに「このように生きていきなさい」と教えるのです。また「こう生きてはならない」ということを命じるのです。それらが可能だからです。なぜなら、私たちは新しく生まれ変わったからです。

このⅡコリント5：9をすでに見ました。パウロが望んでいたことがいったい何であったのか？ご覧ください。「そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。」「主に喜ばれる」ことこそがパウロの生きる目的であった、人生の絶対的な目標であったということを知ることができます。パウロはこの目的のために生きていたのです。このことだけをいつも目標に生きていたのです。神に喜んでいただきたい！と。パウロはここで「私たちの念願とするところは」と言っています。パウロだけではなかった、他の同労者たちも同じでした。彼らはそのように生きていたし、そして、「念願とした」、彼らが熱望したこと、切望したことは、このコリントの教会のクリスチャンたちが、パウロたちと同じように生きることでした。もちろん、それはコリントの教会だけに留まることなく、すべてのクリスチャンたち、時代を越えて、すべてのキリストの救いに与った者たちがそのように生きると、そのことを願っていたことは明らかです。なぜなら、まさに、この主に喜ばれることを行っていく、これこそが私たちの生きる目的だからです。そのためにあなたは生まれ、救われたのです。そして、パウロは「それが可能だ」ということを教えるのです。

なぜ、新しく生まれ変わった者たちはこのような生き方ができるのか？新しく造り変えられたからです。主に喜ばれる人生を生きる者へと生まれ変わったからです。ですから、まず、皆さんに覚えていた

だきたいことは「救いとは生き方が変わる」ということです。

**【神が与えてくださる「救い」とは、「人を新しく生まれ変わらせる」もの、そして、「新しい生き方ができる」のは、あなたが「新しく生まれ変わった」からである！】**

このことを私たちはⅡコリント5章から見て来ましたが、パウロはローマ人への手紙の中でも同じことを教えています。ローマ14：7-9「：7 私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者也没有。：8 もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。：9 キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。」、新しく生まれ変わった私たちクリスチャンの生きる目的がここに書かれています。それは「主のために生きる」ということです。ここには「自分のために生きること」と「主のために生きること」こと、「自分のために死ぬこと」と「主のために死ぬこと」が対比されています。「自分のために生き、自分のために死ぬ者」とは、救いに与っていない人たちのことです。彼らは自分のために生き自分のために死んでいくのです。ところが、生まれ変わった者たちは「主のために生き主のために死ぬ者たち」です。ですから、パウロがここでも教えることは、「自分のために生き自分のために死ぬ者」、かつてはそのような生き方をしていた者たちが、「主のために生き主のために死ぬ者」へと変えられた、これこそが「救い」だということです。

「主のために生きる」とは、どのような生き方でしょう？簡単に言うならそれは「毎日の生活において主のすばらしさが明らかにされ続けることを願いながら生きる生き方」です。あなたの為すことすべてを通して、この主イエス・キリストのすばらしさが証され続けていくこと、そのことを願いながら生きることです。主に喜ばれることをいつも考えそれを選択して生きていくこと。「主のために死ぬ者」とあります。救いに与った者たちは、死によっても主のすばらしさが証されることを願い生きる者たちです。イエスにお会いするその時まで、救われた者たちが考え続けることは、何とかこの私の主に喜んでいただきたいということです。そのことを願いながら歩み続けるのです。

このような人生を生きる者へと変えられた、これが聖書が私たちに教える「救い」です。もう一箇所見たいのは、ガラテヤ人への手紙1：10です。ここでもパウロは「救いとはどういうものか」を教えています。「いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや。神に、でしょう。あるいはまた、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまなお人の歓心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。」、「歓心を買おう」と書かれています。つまり、「人に気に入られようとする」ということです。かつて、私たちは人に気に入られることを願いながらそのように生きて来ました。でも、救いに与った後は人ではなく神に気に入っていただきたい、神の気に入られるようにそのように生きる人へと変えられたことを言っているのです。「人の歓心」ではなく「神の歓心」を買うことを第一に考えながら生きる者、そういう人へと変えられたということです。これが「救い」だと、パウロはこのガラテヤ人の手紙の中でも教えるのです。

**【救いとは、人を完全に造り変えるだけの力をもつものである！】**

皆さん、「救い」というのは大変な力を持っているものです。あなたをその罪の束縛の中から解放する力を持っています。永遠の地獄に向かっていたあなたをそこから救い出す力を持っています。罪の奴隷だったあなたをそこから解放し、神の奴隷とする力を持っています。「救いというのはあなたを新しく生まれ変わらせる力を持ったもの」です。そのことを前回、このⅡコリント5章の中でパウロから教えられたのです。

私たちがこのⅡコリント5章の学びを始めたのは、私たちひとり一人が自分の信仰を吟味しなければならないからです。世の終わりが近づいている今だからこそ、自分の信仰をしっかりと吟味すること、また、自分の歩みが主にお会いしたときに「あのようしておけば良かった、このようしておけば良かった…」と後悔をしないため、そのような生活をしないためにです。私たちはどんなに過去を振り返っても過去に戻ることはできません。でも、残された地上での生活を少なくとも賢く生きることができます。また生きるべきです。そのために、神に喜ばれる歩みをしていたパウロに聞くことが必要です。彼がどのように生きたのか？その秘訣は何だったのか？そのことを彼から学ぶことが必要です。なぜなら、彼はそのように生きたからです。後悔のない人生を生きたのです。彼はまさに神に喜ばれることをいつも選択しながら生きたのです。どうすればその生き方を私も実践できるのか？そこで私たちはこのⅡコリント5：15のみことばから、パウロの教えを受けて来たのです。

このⅡコリント5章の中に、今話して来たように、パウロが非常に熱心に主に喜ばれることだけを考へて歩んでいたということを教える箇所があります。Ⅱコリント5：13をご覧ください。「もし私た

ちが気が狂っているとすれば、それはただ神のためであり、…」、パウロの主に従っている様子を見てある人たちは「彼は頭がおかしいのだ」と言ったのです。そのような非難を受けていたということです。悲しいことですが、今でもそのような非難を耳にします。余りにも主に対して熱心であると、何かおかしいのではないか？と言われたりします。主イエス・キリストを知らない人たちがそのように非難するのは分かります。パウロもそうでしたが、何よりも主ご自身がそうでした。イエスに対してもそのようなわさが立っていたことをみことばが教えてくれます。

問題なのは、イエスを信じている者たちがそのようにすることです。救いに与っている者たちがです。私たちがパウロを見て「彼は気がおかしいのだ、頭がおかしいのだ。」と言いますか？彼は主を愛し、主のために生きたのです。神に喜ばれることだけを考えて生きたのです。神が喜ばれる歩みを実践した人物です。そういう人物を、そういう生き方を私たちは追求するべきであって、その生き方をしている人をもし私たちが非難しているとしたら大変悲しいことです。パウロは人々が見た時に気が狂っているのではないと思われるほど、彼は神を愛し、神のみ栄えのためだけに生きようとしていたのです。

「…もし正気であるとすれば、それはただあなたがたのためです。」と続きます。パウロは冷静に、そして、穏やかに、人々に神の真理を語り続けたのです。この真理を彼らに悟らせるために「正気である」という表現を使っています。彼は冷静にこの真理を分かり易く人々に伝えた、そのことをこの13節が教えてくれています。

パウロは大変熱心な人物でした。まさに、神の栄光のために生きた人物でした。確かに、新しくされた者としての「新しい人生」を忠実に、そして、熱心に歩んでいました。彼が言うように、「けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかす任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」（使徒20：24）と、皆さん、こういうパウロの証を聞いたときに、自分自身に問いかけてみなければいけないことは、「私は同じように生きているのかどうか？」です。パウロが生きたように私も生きているのかどうか？です。主のために生きたパウロ、神に喜ばれることだけを考えて生きたパウロ、神の栄光を現わし続けたパウロ、主によって大いに祝されていたパウロ、そして、天にあって大なる祝福をいただくこのパウロ、いったい、彼の生活の原動力とは何だったのか？です。彼自身が歩んだその術を、その手段を、私たちは特に二つ学んでいきますが、今日はその一つだけを見ていきます。

### ☆新しく生まれ変わった人の「新しい生き方」について

A. 救いの力 （前回見ました）

B. 新しい歩みの動機 = パウロの生活の原動力

#### 1. 神への恐れ 11節

まず、「神への恐れ」が彼の力であるとパウロ自身が教えています。11節をご覧ください。「こういうわけで、私たちは、主を恐れることを知っているので、人々を説得しようとするのです。…」、パウロは自分がそのように生きただけでない、人々にも同じように生きるようにと説得していると、この11節の初めは教えています。ぜひ、皆さんに見ていただきたいのは「主を恐れることを知っている」と言っているパウロのことばです。「主を恐れること」、パウロは何のことを言っているのでしょうか？10節を見ると、クリスチャンたちがさばかれる「キリストのさばきの座」のことが言われています。「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。」と、そして、「こういうわけで」と11節に続いているのです。ですから、パウロの心の中に主に対する恐れを抱かせていたのは、間違いなくこの事実、「私はキリストのさばきの座に着く」ということ、その事実です。

ある人たちはこのことを聞いて不思議に思われるかもしれませんが。なぜなら、この「恐れ」ということばには「敬う」という意味だけでなく、確かに「怖がる」という意味もあるからです。私たちは主イエス・キリストによってすべての罪が赦されました。主イエス・キリストを信じたすべての人は、つまり、クリスチャンは過去も現在も未来もそのすべての罪が赦された訳です。では、それなのになぜ私たちが神の前に立ったときに「恐れ」を覚えるのでしょうか？不思議に思いませんか？却って、私たちは主の前に立ったときに、主を心から誉め称え感謝をささげます。そういう機会ではないのか？と思います。確かにそうです！ 私たちの感謝を表わす機会でもあるのです。では、なぜパウロは「主を恐れることを知っている」などと言ったのでしょうか？なぜ、パウロの心の中に主に対する恐れが存在したのでしょうか？

それは「彼はクリスチャンとして神に対する責任を知っていたから」です。彼は主の前に立って、もちろん、主のために為したその働きの精算を主によってされるのです。主から褒美をいただくのです。

しかし、パウロはこのときに、主の奴隷である自分自身の無責任さが明らかになることを知っていたのです。奴隷としての、クリスチャンとしての「主に対する無責任さ」です。皆さんもご存じでしょう。私たちクリスチャンは主に対して責任を持っています。旧約聖書の申命記 18 : 19 にはこのように書かれています。「わたしの名によって彼が告げるわたしのことばに聞き従わない者があれば、わたしが彼に責任を問う。」、人間は神の命令に従うという責任を持っています。多くの人たちはその命令を無視して好き勝手に生きています。その罪に対して正しいさばきは下ります。我々クリスチャンは確かに罪は赦されています。しかし、だからと言って何の責任もないわけではありません。私たちにも同じように神のみことばに従って行く、その責任があるのです。同じ申命記 29 : 29 を見てください。「隠されていることは、私たちの神、【主】のものである。しかし、現されたことは、永遠に、私たちと私たちの子孫のものであり、私たちがこのみおしえのすべてのことばを行うためである。」、これは旧約聖書のイスラエルの民だけに語られたメッセージだと、そのようには言わないでください。皆さんもよくご存じのように、主の命令に従うということは旧約聖書だけの教えではないからです。

この「隠されていること」とは、神がまだ私たち人間に明らかにしていない将来のいろんな出来事の詳細のことです。どのようなことが起こるのか、その詳細について私たちはまだ知らないことがあります。「しかし、」と続きます、「現されたこと…」、こうして私たちは活字とされた神のみことばを、神のみことばを知ることができるようになりました。ということは、皆さん、このみことばに対して神のみことばに対してあなたは責任があるということです。この神の命令に従うという責任です。

#### \* 「神のさばき」 : 公平で公正な完全無欠なさばきが為される

神のさばき、信仰者であるあなたがイエス・キリストのそのさばきの座についた時に、神の公平で公正なさばき、完全無欠なさばきがそこで執り行われます。そのときにいったい何がなされるのか？罪のさばきはもう私たちと無縁のものになりました。では、このときに何が為されるのか？ I コリント 4 : 1 を見てください。「こういうわけで、私たちを、キリストのしもべ、また神の奥義の管理者だと考えなさい。」、そして、2 節に続きます。「この場合、管理者には、忠実であることが要求されます。」と、見て来たように、旧約も新約も神は私たちに「神に対する忠実さ」を要求していること、そのことに皆さんお気づきになったでしょう。4 節「私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるわけではありません。私をさばく方は主です。」、パウロ自身様々な批判を受けていました。パウロが言うことは「でも、最終的なさばきを下されるお方は神である」と。人はいろんなことを言うでしょうが、最終的にさばきを下されるお方、またそれにふさわしいお方、その価値のあるお方は神だと言います。5 節「ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごとにも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。」、少なくとも、この箇所が私たちに教えることは、あなたが神の前に立つときに、隠れたことが明らかにされるということです。あなたの心の中のはかりごと、考えていること、そのすべてのことが明らかにされるということです。

#### \* 「さばきの座」において、信仰生活のすべての真価が明らかにされる

I コリント 3 : 10 をご覧ください。「与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。」、責任があるということです。どのように生きるかという責任です。11 - 13 節「:11 というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。:12 もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、:13 各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。」、13 節に「各人の働きは明瞭になります。」とありますが、「明白になる、明らかになる」ということです。「その日」とはどの日なのでしょう？「さばきの日」です。あなたが主の前に立つ時のことです。

「その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためす…」と書かれています。この「ためす」とは「検査する、試験する」ということです。テストのことです。つまり、あなたがキリストのさばきの座に着いたときに、神はあなたの心の中に隠れているその思いとか考えとか、それらをすべて明らかにされるということです。そして、あなたが神のために生きて来た人生の正しいさばき、つまり、審査がなされるのです。それが価値あるものであったのかどうか？です。ちょうど、工場でその製品が市場に出して良いものかどうかを検査するように、厳密な検査がなされるのです。これがこのさばきのときです。キリストのさばきの座においてなされることです。あなたの信仰生活のすべての真価が明らかにされるのです。

皆さんに考えていただきたいことは、このさばきの座に着くまで、神はあなたの心のすべてのことをご存じにならないのでしょうか？このさばきの座にあなたが着くまで、神はあなたの心のすべて、あなたの隠れた部分、あなたの働きのすべての動機をご存じないのでしょうか？いや、神はご存じです。神は全知だからです。では、なぜ、わざわざこんなことをなさるのでしょうか？なぜ、キリストのさばきの座に着いたときに、あなたの心のすべてのものが明らかにされるのでしょうか？それはあなたのためなのです。私たちは、自分のしていることが神の前に正しい、きっと、神は喜んでおられると思っています。皆さんもいろいろな働きをいろいろな奉仕をしてくださっています。でも、このさばきの座に着いた時に、主ご自身が本当に喜んでおられたのかどうか明らかにされるのです。

だから、パウロは恐れたのです。人を騙すことはそれほど難しくないかもしれません。日曜日に教会にやって来て、霊的なキャップをかぶって、霊的な洋服を着て、あたかも自分は霊的あるかのように振る舞うことはできます。でも、神を騙すことはできません。皆さんはいろいろな働きをされて来られたし、今もされているでしょう。神はその働きを見たのではなく、その働きを行っているあなたの心を見ておられたのです。どのような動機でその働きをしたのか？どんな思いをもって今あなたは生きているのか？どんな思いをもって、今この瞬間この場に座っているのか？そのすべてがあなたが神の前に立つ時に明らかにされるのです。あなたの本当の姿が、神がご覧になっておられるその姿が、その場であなたの前に明らかにされるのです。

恐ろしいと思いませんか？願わくは、そのような機会を私たちは避けて通りたいと思いませんか？だから、パウロは行動だけでない、自分の心をしっかりと吟味して、正しい心をもって、正しい動機をもって主に喜ばれることをしているか？そのことをいつも探りながら主に従い続けたのです。「私はきっと神さまに喜んでもらっている」と、そう思っている、私の隠れた心の部分をご覧になっている神は何と言われるのだろうか？「キリストのさばきの座に立つ特権」をいただいた、救われたからです。しかし同時に、この方の前に立つときに、自分の本当の姿が私自身に明らかにされるのです。ですから、コリント書の中で「金や銀、宝石、木、草、わらなどが、どれだけ価値あるものであったのか？」、そのことが明瞭になる、「各人の働きは明瞭になります。」と書かれています。Ⅰコリント4：5に「…主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごと明らかにされます。」とありました。この事実が、主に対する恐れをパウロに抱かせたのです。すべてのことを見ておられる神がどのように私をご覧になっておられたのか？そのことを私は知る機会を持つのです。

この「主の前に立つ」こと、すべてをご存じである全知の神によって、私は人生の真価を問われるのだということが、生かされているこの瞬間、神の前に正しく生きていきたいとそのように生きたパウロの動機だったのです。「主への恐れ」が後悔のない生活を送るためのパウロの動機だったのです。パウロはエペソ人への手紙5：21でこのように言います。「キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。」と。間違いなく、このキリストへの恐れというのが、神への恐れというのが、彼の信仰者としての歩みの動機であった、原動力であったと、そのように結論づけることができます。

さて、こうして見て来て、ある人はこのように思うかもしれません。「神からどんな評価を受けようと、私は天国に入れるのだからそれで十分です。」と、そのように思う人もいるでしょう。でも、もしそのように思っている方がいるなら、自分に問いかけてみなければいけない質問はこれです。「あなたは本当に天国に入れるのかどうか？」です。「神からどんなことを言われようと、私の心のその隠れた部分が明らかにされ、その真価が問われようと、私は天国に行けたらそれでいいのだ。」と。この考え方がいかに非聖書的であるかということは明らかでしょう。この考え方は聖書的ではありません。もしかすると、その人にとって「救いとは人生のゴール」だったかもしれません。「救いに与ったからそれで良し」と…。でも、みことばを通して学んでいることは、「救いとはゴールではなくて救いとはスタート」なのです。主によって救われた者としての新しい生き方のスタートなのです。これまで主の栄光を無視して生きてきた私たち、主の栄光を汚して来た私たちが、主の栄光を現す者として新しい生き方を始めていく、そのスタートが救いなのです。

何度も見て来たように、「神がくださる救い」、敢えて、そのことを強調しているのは、自分が勝手に救われていると思い込んでいる未信者がいっぱいいるからです。その人たちはどんなに強く思い込んでも、彼らの生き方は全く変わって来ません。聖書が教える救いというのは、その人を新しく造り変えるその力があるものだと思いました。罪人を新しく生まれ変わらせ、新しい生き方をもたらすのです。自分のために生きる人生から主のために生きる人生へと変わる、これが神の言っている「救い」です。

皆さんがよくご存じのように、どんなに神に喜ばれる歩みを継続したとしても、どんなに主が喜ばれることを行ない続けたとしても、その行ないによって罪の赦しをいただく人はどこにもいません。しか

し、新しく生まれ変わらせていただいた者は、新しい生き方を生きることによって、自分自身が新しく生まれ変わったこと、すなわち、神によって救われたことを明らかにするのです。

イエスは「実によって見分けることができます。」と言われました。マタイの福音書7章に記されています。最後にそこを見てください。非常に大切なこと、今、私たちが学んでいるそのことです。マタイ7：15から、「実によって見分けることができる」と言われますが、その前に「：15 にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」と、つまり、救われていると言う者がそのような様子で、あたかも救われているかのように入り込んで来るが、実は、彼らは救われていないのです。「にせ預言者たち」と言われているからです。見かけは、非常に敬虔なクリスチャンかもしれないが、でも、問題は「心」だと言います。見かけだけ敬虔なノンクリスチャンたちが様々な影響を及ぼすのです。だから、「気をつけなさい。」と言います。

その後このように続きます。16節「：16 あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。」と、「彼ら」とはだれでしょう？見かけでは救われているが、実際は救われていない人たちです。彼らは「実によって見分けることができる」と言います。16節の続きから「ぶどうは、いばからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。：17 同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。：18 良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。：19 良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。：20 こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。」と、文脈を見ると明らかです。救われていると言いながら実は救われていない人たちが出て来て、いろいろな影響を及ぼすと言うのです。だから、本当に彼らが救われているかどうかは、彼らの実によって分かったとイエスと言われます。

その後、21節から見てください。「：21 わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。」、「信じている」と思い込んでいる未信者たちが、最後には、自分が救われていなかったことが明らかにされるということです。大変恐ろしいことです。ですから、この文脈の中でイエスが何を話そうとされたのか？明らかです。救われているかどうかは、その人の実によって明らかだ、その人の生き方によって明らかだということです。神によって救われた人はその生き方が変わるのです。神によって生まれた人は神に喜ばれることを目標として生きると言うのです。しかし、そうでない人は、聖書的な知識をたくさん持っているかもしれない、質問に対して聖書から答えを出せるかもしれない。でも問題は、その生き方が変わっているかどうかだということです。

少なくとも皆さん、前回も、そして、今回も学んではっきりしたことは、神が約束してくださった「救い」、神が与えてくださる「救い」というのは「その人を新しく造り変えるものである」ということです。あなたの救いは間違いないですか？あなたは主によって新しく造り変えられましたか？もちろん、私たちが自分の歩みを見た時に、救われる前と救われた後も同じような罪を繰り返しています。罪から離れようとしても、悲しいことに、罪を犯しています。こんな私が救われているはずがない、こんなに罪を犯し続けている私が救われているはずがない、と思っているかもしれません。でも、救われている人たちは「神に喜ばれることをして行きたい！」と、そのような願いを持っています。「神が喜ばれることを行って行きたい！」という願いをあなたが持っているのは、あなたが救われたからです。

救われた皆さん、どうぞ、この新しい一週間、あなたは必ず、あなたをさばかれる主の前に立つということを覚えてください。罪がさばかれて永遠の地獄に行くこと、それを恐れて生きるではありません。主の前に立つときに、私たちの信仰者としての歩みの真価が私たちの前に明らかにされるのです。本当に主が喜んでおられたのかどうか？そのことが明らかにされるのです。だから、主に喜ばれたいと願っている者は、「本当に主に喜んでいただきたい！」と、そのことを考えながら願いながら、その助けを主に求めながら、主に従って行こうとするのです。

「主を恐れかしこむ」、それは初代教会の特徴でもありました。使徒の働き9：31に「こうして教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行った。」と記されています。教会の人々は、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて歩み続けていたと言います。ということは、こういうことです。主に喜ばれる人となるために、救いをいただいたあなたに必要なことは「主を恐れて歩み続けること」です。そして、この私たちの教会が主に喜ばれる教会となるためには、そういう人がより多く私たちの群れに起こされていくことです。あなたが主を恐れながら生きること、それは大変重要なことです。そして、そのためには、あなた自身が必ずいつか、主の前に立ちさばきを受けること、そのことを覚えて今日を生きることです。感謝とともに、その時を覚えて、主のさばきを、また、主を恐れながら、正しい恐れをもって私たちは主に従い続けていくことです。

どうぞ、あなたの歩みの動機を吟味されて、正しい心をもって、正しい歩みを継続していきましょう。  
必ず、主はあなたを助けてくださる、そして、あなたを祝してくださる。

《考えましょう》

1. パウロの信仰者としての歩みの原動力となっていたことは何でしたか？
2. それらが彼の忠実な歩みの原動力となった理由を挙げてください。  
また、それはあなたの歩みの原動力となると思われますか？
3. 今日教えられたことをあなたの信仰の友と分かち合い、実践のために祈り合ってください。